

---

# 彷徨に祝福を

さいわい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彷徨に祝福を

### 【Nコード】

N6221F

### 【作者名】

さいわい

### 【あらすじ】

「これは彼女への祝福だ」音信不通の「彼女」から手紙をもらった「俺」は、「彼女」と過ごした高校時代を思い出しながら小説に書いていく。自由に生きている「彼女」の魅力を、一匹狼だった「俺」の視点から描いた作品。

## 必要のない前置き

さて、まずなにを書くべきかについて、実は悩んでいたりする。そもそも俺がなぜこんな小説めいたものを書いているのかというと、彼女について書くのにふさわしい人物が、俺のほかにはいないからだ。いや、そんなことは俺の勘違いで、俺以上に彼女を語るにふさわしい人物は、いるのかもしれない。そうだな。たぶんいるだろう。まあいい。そんな奴がもし、いたとして、それでもそいつは書かないかもしれない。やはり俺が書くでしょう。

次に　そうだな、この文章を書く直接のきっかけのことで話すとしよう。それは、彼女からの一通の手紙だった。手紙だぜ。考えてもみるよ、電子のネットワークが世界中に張り巡らされている現代に、手紙だ。彼女らしい、という気もする。そうだ。俺は彼女からメールを貰ったことがない。メールどころでもないか。手紙も電話も貰ったことがない。俺からあげたこともない。へんつ。俺と彼女とのつながりって、なんだったんだらうな、という気もする。まあいい。とにかく手紙だ。

手紙は俺の住むアパートの俺の郵便受けに入っていた。消印はない。だからいつ投函されたものかはわからない。俺は残念ながら毎日郵便受けをあさるという習慣がない。新聞は取ってない。俺に手紙をくれる奴なんていやしねえしな。たまに覗いて、ダイレクトメールを捨てて、それだけだ。だから、消印のないその手紙がいつ入れられたのか、さっぱりわからない。わかったところでどうしようもない。彼女に会いに行く？馬鹿なこと言つなよ。

あはは、驚いた？

ソーリーソーリー　ごめんよベイビー

今度、アイドルデビューすることになりました

デタラメですよ、もちろん

ま、元気にやってます 君は元気かな？

月がきれいです 星もきれいです

手紙なんて、初めて書いたなあ わあい

ルンルン でわでわ

手紙に書かれていたことはそれだけだった。意味がわからない。その文句が、便箋いっぱい習字で使う筆と墨で書かれてあった。信じられるか？俺はその便箋をしばらく（そうだな、30分くらい）眺めてから、封筒を手にとった。そのあて先には確かに俺の住所と名前が書かれてあって、差出人は彼女の名前が書かれてあった。住所はない。それでいい。彼女に住所は似合わない。

で、それから俺はどうしたかというのと、別にどうもしなかった。だってそうだろ？なにをしろっていうんだ。彼女が俺に手紙を寄せた意味や、文面の意味を考えようかと、一瞬だけ思ったけど、すぐに思い直した。考えたところでどうなるんだ？俺が彼女をつかまえておけるとでもいうのか？

俺は手紙を封筒に丁寧に収め直して、そこらに放っておいた。以来見ていない。たぶん今も俺の散らかった部屋のどこかにあるんだろう。

俺がこんな珍妙な文章を書くきっかけとなったことについて、もう一つだけ話すことにする。

俺は高校を出たあと、一浪して他県の大学に入った。勘違いするなよ。三流大学だ。別に勉強がしたかったわけじゃない。かといってしたいことがあったわけじゃない。モラトリアムっていうのか。だから日々なすこともなく過ごしている。まったく、俺も堕ちたもんだ。それでも大学に行きたいといったとき両親は泣いて喜んでた

な。そりやそうか。高校までの俺の生活は、はたから見れば今よりももつと最悪だったんだろうからな。

俺の両親は極めてまっとうで、極めて理解にあふれていて、極めて自立的な親だったから、残念ながら俺には彼らを憎むということができない。勝手にいなくなることもできない。まともな道から外れることもできない。仕方がない。せいぜいこれから親孝行しなければ、と思う。苦労かけたからな。

どうも話がそれていけないな。「小説家」の話だ。「小説家」つてのは、俺の隣に住んでる奴で、「小説家」つてあだ名は俺がつけた。俺と同じ大学生らしいが、奴はひきこもつて小説ばかり書いている。俺は小説なんて読まないから、奴の小説がいいものか悪いものか知らない。どうせ悪いものに決まっている。ひきこもりにいいものが書けてたまるものか。

なぜそんなひきこもりと俺が知り合いになつたのか、詳しく話す気はない。というか、あまり覚えていない。とにかく俺が奴の部屋に行ったとき、奴の部屋が小説と原稿であふれていたことに驚いたことだけ覚えている。「小説家」というあだ名はそのときつけた。よく考えたら本名は覚えていない。

とにかくこの小説らしき変な文章は、そいつに勧められて書いている。どう勧められたか、ここに詳しく書く必要もないだろう。奴が小説のネタを探していた時に、おれが彼女のことを話した。奴はそれを小説に書かなかつた。「それは君が書け」それが奴のそのときの言葉だ。だから俺はこんなへんてこな文章を書いている。

そうだ、もう一つだけ断っておくことがあつた。最初俺は彼女にも俺にも名前をつけるつもりはなかつた。この話は完全に俺と彼女だけの話だからだ。けれど「小説家」が言った。

「名前は付けなくてはいけない。君とこの女性の物語を、そこらに転がっている普遍的な物語にしないために、名前は付けたまえ。名前は大切なものだ。名前をつけるからこそ、その物語には独立性や特殊性が生まれる。あくまでこの物語は、「君」と「彼女」の物語

でなくてはいけないよ」

言ってることはわからなかったが、とにかく名前はつけることにした。そもそも「小説家」が居なければ、この小説は書かれていないのだ。

彼女は「彷徨」という。その言葉が彼女を表すに最もふさわしい言葉だと思うからだ。

俺は「芥」。理由はわかるだろ。どうでもいい人間だからさ。

## はじめに

よく考えてみれば、さようならを言っていない。最後に聞いた彼女の言葉はなんだったかと思えば、それは「空だ」というよくわからない言葉だったりする。

なんだ。「また今度」とでも別れていれば、また会う希望はあったかもしれないのに。せめてまた会えることを信じるくらいはできたかもしれないのに。

では「空だ」とはなんだ。どんな状況だ。覚えていない。だから想像してみるとしよう。たぶん、橋の上だ。流れる川照る太陽。人通りのない道。けだるい昼下がり。彼女は欄干から身を乗り出すように、空を眺める。俺はその隣にいる。そこで、彼女は「空だ」と言った。あるいは「青い空だ」とでも言ったのかも知れない。

彼女らしい言葉だと思う。空には無限の広がりがあるからだ。彼女はそこを闊歩するのだろう。地上など、彼女には狭すぎる。いや、空だって狭いと、俺は思う。けれど空は果てが見えない。見えないものは可能性だ。可能性を信じて、彼女は歩く。どこまでも歩く。世界のすべてを知るまで、きっと彼女は歩いていく。

どうか世界よ無限であれ。

せめて、さよならくらいは言いたかった、と思う。だって、別れくらいはかつこつきたいじゃないか。「さよなら」と言って、きつちり境界を引いておけば、あるいはこんなへんてこな文章書くこともなかったかもしれない。思えば、この文章は俺なりのけじめなんだな。

墓碑の言葉。

レクイエム  
鎮魂歌。

いや、彼女への祝福だ。

## 河原での殴り合い

「やあ、あたしの子分を締めてくれたらしいじゃないか」それが彼女が俺に言った最初の言葉だった。

「やるか？」俺は一言だけ言った。

それから殴りあった。一対一の決闘さ。男と女の、真剣勝負。そうだな、そのときは、本気で命さえ賭けてたかも知れない。

結果？察してくれよ。

その日で俺は喧嘩を止めた。

俺と彼女との出会いを語るためには、まず俺のことを話さなくてはならない。

最初に人を殴ったのはいつだったかな。よく覚えていない。ほんとに原点を求めるんなら、幼稚園の時だろう。そのくらいのときなら、誰だって喧嘩する。園で乱暴だった奴が、成長するにつれて臆病な奴になる。そんなことだってある。つまり、そのくらい、幼児ってのは凶暴だったことだ。

そんな昔のことを話しても意味がないな。そうだな、中坊のころには、もう人を殴る習慣があったような気がする。理由？特にないどこにだってむかつく奴はいるだろ？普通の奴は、そんな奴がいても、避けるとか逃げるとかするんだろうな。けど、俺は殴った。ポコポコにした。病院送りにしたことは、なかったと思う。こう見えても、サツ沙汰になったことはないんだぜ。停学謹慎、そういうこととはけっこうあったけどな。

相手を見つけるのに苦労はしなかったよ。一人殴ったら、噂が立つだろ。そしたら、向こうが勝手に寄ってくるんだ。「でかい面してんな」「やんのかこら」って、そういうことだ。で、そいつも殴る。噂が立つ。寄ってくる。殴る。繰り返しだ。

それでも、俺はおとなしかったもんだよ。喧嘩してたのは校内だけのことだもんな。遠征っつーか、地域制圧？そういうの。いまだき流行らないから、やってたのかどうかもしらねえけど、俺はやらなかった。さつきも言ったように、俺は向こうから来るのを待つタイプだったからさ。自分から動こうとはしなかったから、校外には出て行かなかった。

ああ、けど、校内では一年も経たないうちにトップになってたな。それから、退屈な毎日さ。殴る奴もいなくなって。近寄ってくる奴すらいなくなって。四月は、けっこう楽しいんだ。新入生がいるだろ？そこには、生意気な奴もいるんだな。そいつを殴る。不思議と、負けなかったな。でも、ひと月もしないうちに、また退屈さ。毎日なにしてたんだろうな、俺は。群れなかったし。今思えば、さびしかったな、あの頃は。

で、俺は高校生になった。喧嘩ばかりで、高校行けるのかわつて？俺も不思議だ。けど、少子化つてえのか。それのおかげで、俺なんかでも高校行けるようになったのさ。大学にすら行けている。変な世の中だ。

とにかく、高校だ。俺が行くような高校なんだから、どんな高校かは想像できるよな。クラスの10分の9が不良っていう学校さ。不良じゃないやつはなにかつて？知らん。勉強ができないだけの奴もいたし、めっちゃめっちゃに勉強ができる奴もいた。どっちにしる、俺には理解できない人種さ。

入学式の時から空気がギスギスしてたな。そりゃそうか。新入生も不良なら、上級生も不良だもんな。校長の話だかなんだかを聞きながら、俺はけっこうワクワクしてた。ようやく生き返ったというか、楽しくなったんだな。そうだろ？中学の俺は、欲求不満も甚だしかったんだぜ。ここには俺を知らない奴らがいっぱいいる。喧嘩できる。そう思ってたんだな。

最初は入学式の日だったかな。俺が帰ろうとしていると、上級生っぽいのが二人連で、「よう、金貸せよ」なんて言ってきたやつがった。

この二人は、ガムくつちゃくつちゃしながらボントンのポケットに手つつこんで前かがみで、「はあっ?」、みたいな、よくある不良を想像してもらって構わない。というか、俺も含めてほしいそんな奴ばかりだった。女子は知らない。そもそも数が少なかったし、女子に手え上げる趣味はなかったからな。

俺は唾を吐き捨てて、まっすぐ奴らに向かつて行った。奴らはあつげに取られたみたいで、簡単に片方を押し倒して馬乗りになることができた。あとはとりあえず、そいつの顔を殴った。右左右左と何回も。かたわらでもう片方の奴が必死で俺を引き剥がしにきたけど、そんなことはおかまいなしさ。とにかく俺が一心不乱に殴つてたら、下の奴は気絶して、もう片方は怖くなつて逃げたので、あとはほっとして帰った。それで終いだ。こいつらは小物だったな。

そもそも下級生に二人連れで挑むのがどうかしてる。そんな奴らはみんな小物だ。俺の経験からすると、いつも一人でいる奴のほうが強い。群れる奴は、仲間を頼りにしちまって、だめになつちまうんだろうな。

勝負の時もそうだ。いつも群れてる奴でも一人で戦う時は強い。戦うとき仲間がいると、個人で見ると弱くなる。尤も、それは悪いことじゃない。相手する方に見れば、一人よりも多数の方が嫌だ。全体としては強いからな。

初日で上級生ボコつた奴は俺の他にもいただろう。ボコられた奴もいただろう。だからかは知らんが、一人をノックアウトしたお咎めは、特になかった。だから次の日も喧嘩だ。因縁つけてくる。殴る。勝つ。しばらくは、そんなことの繰り返しだ。

そうやって、俺の高校の不良どもは、淘汰されていった。半年もすれば、強い奴が残っていき、他の奴らは強い奴の下についていくことになった。俺は群れなかったけど、その頃校内にはいくつかの勢力ができていたらしいな。

後から聞いた話だと、俺の知らないところで大規模な(勘違いするなよ、あくまでも高校レベルの話だ)抗争なんかも起こってたら

しい。そうやってまた淘汰されて、俺も毎日喧嘩して、ときどき停学くらって、そういうしている内に一年が過ぎた。

さつきも言ったように、四月は少し忙しくなる。殴り合って勝ったり負けたりしたあとで、勢力ができて平穏が保たれているところに、なにも知らない生意気な下級生が現れる。俺はもちろん俺のほうから喧嘩を吹っかけることはなかったけど、二・三日するところまで俺の噂を聞いたのか、俺に挑んでくるバカがいる。二・三日の間に上級生の洗礼を受けてきた奴だから、そこそこ強い。四月は俺、好きだったな。

その年も俺は四月中を下級生と、まだ俺に突っかかってくる同級生・上級生をボコることで明かして、また退屈な五月以降が始まるんだと思っていた。けど、違った。その年は五月以降もバカがたくさん現れた。殴って蹴って、全部勝った。

何度か勝っているうちに、俺はあることに気づいた。五月以降、俺に挑んでくる奴は、全員一人でやってきた。さつきも言ったように、一人でやってくる奴は自信のある奴だ。強い。俺もそういう奴の方が好きだ。俺の好みなんかどうでもいいか。

それでちゃんと考えてみると、どうやらそれは去年の三学期くらいからのことらしい、と気づいた。俺にサシで挑んできて、負けていく。四月は下級生もいたからだろう、二・三人、多いときは五人くらいをまとめてボコったこともある。けど、一年の時の一月以降三月いっぱい、二年に上がってからの五月以降、は全部一対一だ。それに気づいてから、次にボコった奴に俺は訊いてみた。

「お前、なんで一人で来たんだ？」

「なに言ってるんだ？気でも狂ったのか？」気違い扱いされた。なんてことだ。

家に帰ってからもう一度考えてみた。

俺の知らないうちに、どこかで勢力抗争が行われたことは知って

いる。つまり、校内の格付けはだいたい終わっているはずだ（新入生は除く）。なのに、俺に突っかかってくる奴が多いのはなぜだ？

俺の仮説はこうだ。校内にあつたいくつかの勢力は、抗争をする勝った勢力は負けた勢力を取り込む。争いは、もう終わってるんじゃないだろうか。つまり、どこかの勢力が、他の全ての勢力を、もう従え終わっているんじゃないだろうか。

天下統一を果たした勢力は次になにを望むか。俺のようなはぐれ者を勢力に臣従させることだ。

つまり、今まで一人で俺に挑みかかってきた奴は、刺客なんだな、その勢力が放った。

ここまで考えて俺は頭の使いすぎで疲れたので、寝た。快適に眠れた。

次の日登校した俺は、そこらに歩いていたら不良っぽいのを掴まえて、「この学校を今仕切っているのは誰だ？」と訊いた。

「なにを言ってるやがる」そいつが言うには、俺が知らないはずはない、ということだった。「あんた、二年だろ。なんで知らないんだよ」もつともな言い分だった。

「それでも知らん。教える」

「そのうち、あんたとこにその人が行くよ」あとで訊いた話だが、そいつも勢力の一人だったらしい。というか、その時点で勢力に与していないのは、学校中で俺一人だったらしい。学校とは狭いところだな。

で、放課後。

俺は河原に呼び出されて待っていた。河原だぜ。どうも、喧嘩するにふさわしすぎるだろ。けど、いいじゃねえか。事実なんてそんなもんだ。

で、やってきたのが彼女だった。ああ、やっと彼女の話ができる。俺の話が長すぎたな。

「やあ、あたしの子分締めてくれたらしいじゃないか」彼女は言った。

「やるか？」俺は一言だけ言った。

女だから手加減した、なんて言わない。殴りあう前、そういう気持ちはあったことは確かだ。けど、彼女の右ストレートをもらった瞬間、目の前の相手を女だと思うことは止めた。そのストレートは俺の左あごを的確に捉え、俺は天国まで吹っ飛ばされたんじゃないかと思つた。一瞬だけ目の前が真っ赤に染まって、強烈な吐き気に襲われた。

俺は間合いをとって一息入れた。彼女が俺を追撃しなかったのは、余裕だったからだろう。彼女はニヤニヤ笑っていた。

舌に鉄の味を感じたので、俺はベツと唾を吐き出した。それから彼女を睨み据えた。別に意味はない。かっこつけたかったんだ。

彼女はへらへらして、構えすらとっていなかった。余裕しゃくしゃくいつでも来なさい。俺は腹も立たなかった。むしろ嬉しかったくらいだ。俺の全部をぶつけよう。そう思った。もしかしたら、終わったら死のう、くらい思っていたかもしれない。もちろん俺は今も生きていて、こうして文章を書いている。

それからあとのことはあまり覚えていない。無我夢中で殴って蹴って、殴られて蹴られた。殴った拳は痛かったし、殴られた頭も胸も腹も腕も足も全部痛かった。どれくらいやったんだろうな。そのうち失神。はは。完全無欠に、俺の敗北だ。

照れた太陽がおはようを告げて

生きることはとても楽しい

震えているのはわたし？

明日をただ待っているだけ

虹の美しさも知らずに

気がついたら歌声が聞こえていた。目の前に青い空があった。あ、あ、青い空だな、なんて、大真面目に考えていた。とても綺麗な歌

だと思った。青い空に、よく似合っている。たぶん、頭を殴られて少しイカレちまってたんだろう。ここは天国なのかな、なんて考えてた。

「ああ、どうやら気がついたんだね」歌が止んで、声が出たので横を向くと、彼女が座っていた。つまり、彼女の歌声だったんだな。体育座りだった。しょうもないこと覚えてるもんだな。

「負けたのは初めてだ」俺は言った。本当のことだ。生まれてからこのときまで、俺は喧嘩に負けたことはなかった。負けたと感じたこともなかった。言っとくけど、それで優越感を感じたことはない。他人のことなんてどうでもいい。だから、そのときまで勝ちとか負けとかは俺にはなんの意味もなかった。今もない。あの時の敗北だけだ、意味があるのは。

「そうかもね。今までで、いちばん強かったのは、お前かも知れない。ま、女だからって手加減しなかったのが、お前だけなのかも知れないけど」

「馬鹿なんだな。世の中の奴らは」

「あたしもお前も含めてね」彼女はぎゃははと高らかに笑った。

それから黙ってしまったので俺は寝た。眠る前に、これで喧嘩も終わりだな、と思った。なぜだろうな。喧嘩は俺の人生だった。殴って殴られている時にだけ生きている実感があつた。負けたことはなかったけど、たとえ負けることがあつても喧嘩から離れることはできないだろうと思っていた。なのに、喧嘩は終わりだと思った。不思議と安らぎがあつた。ほんとに誰かに負けたかつたってことかと思つた。思いながら意識が遠くなつていった。意識の奥底で、また歌声を聞いた気がした。

起き上がったとき、もう辺りは暗くなつていた。暗くて薄っすらとしか周りのものが見えない。空を見上げると藍色の空に月が黄色く輝いてやがった。月ってもんは綺麗なんだな、と思つた。綺麗だなんて、今まで俺は思つたこともなかった。喧嘩に負けたから、たぶん俺は生まれ変わつちまつたんだな。少しは冷静に世界を眺める

ことができるようになったらどう。

そんなことを思ってから視線を下に移すと、まだ彼女が体育座りで座ったままだった。もうとっくに帰ったものだと思っていたから、俺は驚いた。なに考えてるんだらう、この女は。俺を気づかっただけで、冗談じゃない。勝者に気づかわれて、なにがありがたいものか。

なんでまだいるんだよ、とでも言っただろうと思ったとき、彼女が寝息を立てていることに気づいた。なんだ、この女も寝てるだけか。体育座りで寝るなんて、器用な奴だ。

俺はさすがにほっとして帰るなんてまねはできないから、肩をゆすって起こした。つまり俺が他人を気づかしたことになるから、やっぱり負けて俺は変わっちゃったんだな。

腕にうずめられていた彼女の顔がゆつくりと上がった。

長い髪の間隙から、彼女の瞳は上目遣いに俺の顔を見てきた。

俺は今でもこの光景を完璧に思い出すことができる。馬鹿みたいなのに、何度も何度も思い出してきた光景だ。何度思い出したって、この光景は色あせることがない。

それくらい、このときの彼女の顔はかわいかった。

「お前、誰？」寝ぼけまなこで彼女はそんなことを言っていた。俺はそんなたわごとにつきあう趣味はないから、さっさと立ち上がって帰ろうとした。

彼女は立ち上がると、俺の後頭部を右ストレートで殴りやがった。ひどい話だ。俺の体はなにもかも尽きてしまっていたので、踏ん張ることもできずばたんと倒れてしまった。なにしゃがるんだ、と思っただけで、殴り返す気力もない。どころか、起き上がる気力すらなかった。そのままうつぶせたまましていると、彼女は俺の襟首をつかんで強引に引き起こしやがった。敗者つてのはみじめなもんだな、と思っただよ。

「明日から、お前もあたしの配下になれ」彼女は言った。ああ、そっとういう闘いだっただのか、と俺は今さらながら思った。

「殴り足りないなら、別の人間とやってくれ。俺はもういい」腹

の底に残っていた体力を搾り出して、俺は言った。叫ぶ力があればこう叫んだらう。俺はもう疲れているんだ、帰らせてくれ。

「一匹狼は矜持ロソリウルフを失わず、か」彼女は手を離して俺を解放した。体力の残っていない俺はあごをしたたかに打ちつけることになった。痛え、と言う体力すらない。

ああそうだ、たぶん馬鹿にした奴も居るだろうけど、一匹狼とは俺が言い出したことじゃない。校内でなににも属さない俺に、誰かが勝手につけたあだ名らしい。狼なんて、俺はそんなにかっこいいもんじゃない。俺の名なんざ、塵ダストか芥ダストで充分だ。

「いいだろうさ。あたしは一匹狼をあえて群れさそうとは思わない。敗北を噛みしめながら、さびしい余生を送るがいいさ」

彼女は歩いて行ってしまった。そのときの俺は、ああこれで全部終わったな、という感情でいっぱいだった。満足感と空虚感。

根性で寝返って空を見た。月と星が綺麗だった。

## 彼女の喧嘩の終わり

「あんだ、なんでこんなことやるんだ？」俺は彼女に訊いた。

彼女は答えず、ぎゃははと笑った。高らかに空まで届く笑いだった。遠く遠く空のどこまでも声は伸びていって、やがてどこかで消えていった。

ひとしきり笑って、「お前はやらないのか？」と訊いてきた。もちろん俺は首を横に振った。もう喧嘩からは引退。錆びた余生をさびしく送る身だ。

「あたしもこれでこの遊びはおしまいだ。行くところまで行ったからね」さびしい感じはなかった。むしろ誇らしげにしていた。たぶん、全てやりきった、とでも言いたかったに違いない。

その言葉の通り、その日で彼女の喧嘩人生は終わった。

「デートしないか、一匹狼<sup>ロンリーウルフ</sup>」こう彼女が言ってきたのは、さていつだったかな。二年の 寒い季節だったかと思う。もちろん季節なんざどうでもいい。三年の夏以降でないことは確かだ。というのは、三年の春の終わりくらいから、俺の生活が少し変わったから、覚えてるんだな。その頃から、俺は彼女の近くにいたようになった。デートしたのは、それ以前の話だ。

「なかなかいい考えだな、彷徨<sup>ワンダリング</sup>。できればロンリーウルフは止めてくれるとなおいんだがな」

「彷徨<sup>ワンダリング</sup>つてのはなんだ？あたしか？」

「元気に遊びまわっているからな」

「お前のことをなんと呼べっというんだ？」

「芥だ。ゴミのような存在だからな」

ぎゃははと彼女は笑った。おしとやかなって言葉とは対極にある笑いだ。当たり前だけどな。彼女はうちの高校を従えちまってるん

だぜ。おしとやかだったなら、笑つちまう。

「ゴミか。お前がゴミなら、あたしはなんだろうな。ゴミクズ以下。あはは。そりゃいいや。あはは。あはは。」

馬鹿言うなよ、あんたがゴミ以下なわけないだろ、と思ったけど、俺はあえて口に出さなかつた。彼女はふざけているわけじゃなかつた。わからないけどな。本気だったんだろうと、俺は思う。今でも彼女は自分のことをゴミ以下の存在だと思っっているかもしれない。きつと、だからこそ彼女はあんなに楽しんでいるのだ、人生をな。

「デートなんて、お前、したことあるかい。ありそうだな。お前、意外とかっこいい。それに一匹狼気取りっつてのは、好きな奴は好きそうだしな」

「あんたのデートは、喧嘩かな」

「あつたり前だろ。生まれてから今まで、男にときめいたことなんか一度もなかつたさ。おいおい、変なこと考えるなつて。あたしより強い人物なんて、掃いて捨てるほどいたさ。それでも好きにはならなかつたな。今後だつてないかもしれねえな」ぎゃははと笑う。

「好きにしてくれ。俺を巻き込むな」一応言つとくが、俺は彼女に惚れていた。今も惚れているんだろうな。けど、彼女に関わりたくなかつたというのも本当だ。俺は静かに過ごしたかつた。彼女のぎらつくような生命力は、俺にはまぶしすぎるんだ。フラフラして、ばたん。だから近寄りたくなかつた。たとえ今後彼女を越える女はどこにもいないのだとしても。もう誰かを好きになることはないのだとしても。彼女に近づくことは、無理なんだな。

「ちよつと、デートだよ。どこ行くんだよ」俺は彼女から逃げるように去ろうとすると、彼女は追いついてきて腕を絡めてきやがった。なにしゃがんだ、と本気で思った。すまん、少しうそをついた。けど、腕を振り払つたのはほんとだ。

「頭、イカレちまつたんじゃないのか？」

「バーカ。あたしの頭は、ずっとイカレっぱなしだよ。おい、くつついて歩こうぜ」

「寄るな。俺は帰る」ああ、でもダメだな。二回目に彼女が腕を絡めてきたときは、どうもしなかったものな。この女、ほんとに頭イカしたんだろうな、なんて思いながらも、彼女の腕の感覚は本物だからな。意外と華奢でやわらかかったな。なに言ってるんだ俺は。

それからどうしたかって？どうもしねえよ。ただ歩いた。二時間くらいかな。ずっと。馬鹿だと思うだろう？けど、どうしていいかわかんなかったし、彼女だってどうしたいってことはなかったんだろう。しばらくすると暗くなって、それでも歩いて、俺がくたびれた頃に、「そろそろ帰れ」って言ったら帰った。だから俺も帰った。それだけだ。

二時間のあいだ、少しばかり話した。他にすることないもんな。俺のことも話したし、彼女のこともし少しだけ聞いた。家族はみんないい奴で、あたしだけがイカしてる。初めて人を殴ったのは小坊のとき。以来喧嘩と生活がイコールで結ばれている。校内で俺以外の奴はみんな彼女の配下になっている。みんな弱い。格闘技をやったことはあるけど、ルールは嫌いだ。今のところ、喧嘩がいちばん。けど、そろそろ飽きてきた。勉強でもしようかな、と思ってる。

そんな話だ。本当にそんな話だったのか、よく覚えていない。

勉強って言葉が出てきたから、ついでに彼女の進路を教えなくて。彼女はストリートで大学に受かった。俺でも入れるような三流大学でなく、まあそれなりに名のしれている大学だ。受かったことは直接聞いたけど、「一日も行かずに退学してやるんだ」と言っていた。たぶん一日も行かずに退学したんだろう。入学金が無駄だな。かわいそうに、おやごさんは。

それから、もう一つ覚えている。「なにをしてもつまらないよ」と彼女は言っていた。さびしそうな顔だった。でもどうかな。ほんとに確かな記憶かな。記憶なんてもんは、不確かなもんだ。だからほんととは言ってないかもしれない。

それが確かな記憶だったとしても、彼女が不幸なのかどうか俺には判断つかないし、どうでもいい話だ。俺も彼女もどうせ死ぬ。き

つと彼女はつまらない人生を楽しく生きるだけなのだ。高杉晋作みたいなこと言っちゃまったな。はは。

なんかあんまり覚えていないな、あの頃の話は。そりゃそうか。俺はさびしく淡々とした高校生活を送っていたんだものな。友達もいない。彼女もない。これでどうやって楽しくやれというんだ。喧嘩を続けていればよかったのかもしれないけど、ま、いまさら言っちゃって仕方ないやな。

高校の雰囲気がおかしくなってきたのは、俺の三年生のとき、たぶん春と夏の間くらいの時期だ。雰囲気がおかしいって、変な表現だな。どういえばいいんだ？もともと殺伐としてたのが、もっと殺伐としてきていた。教室は荒れて、授業受けるやつなんて、数人にも満たないくらいだった。俺一人で授業受けたこともあるな。先生も気の毒に。それでも頑張って授業してたよ。

雰囲気がおかしくなったからって、俺がどうこうすることはないよな。俺はもう枯れた人間だったから。なにがどうおかしいのか突き止めようとするのもなく、ただ淡々と、日常を送っていた。なにをするでもなく、喜ぶでも悲しむでもなく、日々が過ぎていった。そんなもんだろ？人生なんて。

そうやって傍観してもいられなくなったのは、また喧嘩吹っかけられるようになったからだ。登校中、下校中、休み時間。不良どもは俺の行く手を阻んで殴りかかってきた。なにを言うでもなく、いきなり殴りかかってくるんだぜ。最初のころは適当にあしらっていたけれど、仕舞いにはめんどくさくなって殴り倒すようになっていた。それでもとどめはささない。俺の灯は消えました、もう点きません、ということだ。

殴られるのは面倒だから、俺は彼女に会うことにした。何度も言うように、この高校を仕切っているのは彼女だったからだ。もちろん不良どもが俺を狙っているのは、彼女の指図なんかじゃないだろ

う。彼女が俺を狙う理由がない。彼女に会うことにしたのは、配下に俺を狙わないよう、指示してもらったためだ。

けど、彼女に会うのは大変だ。俺は彼女の連絡先を知らないし、彼女が何組なのかも知らない。普段どこでなにしているのかも知らない。それまでに会ったのは、俺が殴られたときと、彼女と歩きまわった二回だけだった。結局、今まで彼女に何回会ったんだろうな、俺は。

とりあえず殴り倒したやつに彼女の場所を訊くことにした。登校中のことだ。

「知らない」それが答えだった。そいつは群れの中でも下っ端のやつだったんだな。

「じゃ、知ってそうな奴に会わせろ」というと、そいつは携帯でどつかに電話して、しばらく待っていると男が現れた。一人で来たから、強いんだろうな、と俺は憂鬱になった。よく考えたら、殴り倒す必要なんてないんだけどな。

「あんたらの頭に会わせてくれないか？」

「今、あの人は忙しいんだ」

「じゃ、別にいい。俺を狙うのをやめるよう、言ってくれ」と俺が真面目に話していると、やつこさん、いきなり殴りかかってきやがった。右ストレートがあごに命中。全盛期なら不意打ちでもよければただけだな。

「ああ、いてえ」とおどけようと俺はしたんだけど、奴はとにかく手を休めない。仕方ないので俺も相手することにした。奴が来るのに合わせて、俺も手を出す。カウンターって奴だ。一発で終わらせなかったからあごを狙うと、そのとおり一撃で終わったな。奴はひざから倒れて立てなくなった。

「いつたいなんで俺を狙うんだ？」

「それがあの人の指示だ」とそいつは言った。聞いた瞬間、俺はまぶす耳を疑った。それから世界を疑った。世界が四次元にもひん曲がっちまったのかと思った。俺は少しフラフラした。奴のストレート

トよりフラフラした。それからフラフラと歩き出した。

「彼女がそんなことするはずないじゃないか」いつの間にか俺は自分の部屋のベッドの上において、ひとり言を言った。頭の中は真っ白で、見える世界は真っ暗だった。どうやって帰ったのか覚えていない。仰向けになって、いつか意識が遠のいていった。つまり寝た。

起きたら少しはスッキリしていた。「彼女がそんなことするはずないじゃないか」もう一度つぶやいてみた。むなしかった。

家にいても仕方がないので、俺は学校に行くことにした。まだ時刻は昼過ぎだった。学校に行つて、授業を受けた。つまらない授業だった。先生、たまには面白い授業をしてくれればいいのに。

やっぱり俺は彼女に会いたかったから、そこらへんにいた不良を殴ることにした。そいつもやっぱり下っ端だった。だから、また上層部を呼び出させて、そいつも殴つた。簡単だ。

「彼女に会わせる」俺はそれしか言わなかつた。拒んだら殴つた。拒み続けたから殴り続けた。忙しい、ってそいつはうわごとのように言つてたな。たぶん「彼女は忙しい」と言つていたんだらう。そんなこと俺にはどうでもいいことだった。俺は殴り続けた。

殴るのにも飽きてきたころ、「わかつた」といって、そいつはどこかに電話をしていた。彼女がやつてくるかと思つてしていると、やつてきたのは男だった。俺はがっかりして、また殴らなければならぬのかと思つた。俺は殴りかかつた。

「いや、もうやめよう。あの人に会わせる」そいつがそう言つたらしかつたので、俺は殴るのを止めた。あの人つてのはもちろん彼女のことだ。

連れて行かれたのはなんかの部室だった。うちの高校では、部活を真面目にやる奴なんてなく、部室は放置されっぱなしだった。その中の一つを彼女の組織が占拠し、自由に使っているらしい。「あたしの活動拠点だ」とは彼女の言だ。

その中の一番奥に彼女は陣取つていた。たぶん取り巻きが何人もいたのだらうけど、俺の目には入らなかつた。彼女を見た瞬間、俺

は走り出して、彼女に殴りかかった。理性的な行動だったのか、今でもよくわからない。俺は彼女に憤っていたのかもしれないし、あるいは彼女に会う時の儀式として、殴りかかるのが当然だと思っていたのかもしれない。どちらにせよ俺は殴り倒された。俺の拳は彼女に届かず、彼女の拳が的確に俺のあごに当たった。俺は仰向けに寝転がって、意識はまだはつきりしていた。

「ずいぶんな挨拶だな」彼女は言った。

「こっちのセリフだ。なんで、俺をそつとしてくれなかったんだ。俺はもう、何もしたくなかったのに。それをあんたはわかってきていると思っていたのに」たぶん涙声だったろうな。

「きつとお前はあたしのところに来ると思ったからさ。そして思い通りになった」彼女は俺のところまで来て、顔を覗き込んだ。喜悦を浮かべていた。ぞつとしたな。ああ、俺は死んだ、俺はそう思った。それくらい、彼女の笑みは綺麗だった。かわいいとは言わないな。綺麗だった。

「俺をどうしたいんだ」

「あたしの近くにいろ。そしてあたしのすることを見ている。それだけでいい。喧嘩はしなくてもいい。これからあたしがしようとしている、馬鹿げた振る舞いを」

「嫌だ」

「断ったら」彼女は振り向いて、顔が見えなくなった。

「殺すよ」

怖かったな。感情がまったく感じられない声だった。けど、その声に俺はどうしようもなく惹きつけられた。たぶんそれくらい魅惑的な声だったんだろう。それに、悪い要求じゃなかった。俺は喧嘩しなくてもいい。そして、彼女の側にいられる。

「なんで、俺なんだ？」いつだったか、俺は彼女に聞いた。「なんで、俺に見ていると？」

「さあな。お前はあたしの配下じゃない。それ以上の理由はないな。配下はあたしの駒だ。あたしを見てもらうのに、適していない」  
俺はたぶんがっかりしたんだろう。今でもがっかりしている。彼女は俺を、俺が俺である、という理由で選んだわけじゃなかった。あの条件にかなう人間で、たまたま目にとまった、それが俺。彼女にとって、特別な存在じゃない。

もしも彼女に特別な存在がいるのなら。今はいなくても、これからそんな存在が現れるのなら。それは、俺にとって、妬ましいことではあるけれど、きつと、望ましいことだ。なぜなら、そのとき初めて俺は彼女の呪縛から逃れられるからだ。たぶん。つまり、上手くいえないけど、彼女が一人でいる限り、きつと俺は誰かを好きになることはないんだろうと思うんだ。彼女と結ばれたいわけじゃない。そんな欲望は、抱いたことさえないと言い切れる。それでも、俺は彼女という存在に縛られているんだな。

彼女にとって特別な人間。現れる、という気持ちがないでもない。ああ、けど、俺は、思い切れないな。彼女は、たった一人で世界を闊歩してこそその彼女なのだ。二人連れは似合わない。

彼女になにが起ころうとしていたのか。もしくは、彼女はなにを起こそうとしていたのか。彼女は自分で、「馬鹿げた振る舞い」と呼んだ。それは何か。

結局俺は彼女からなににも聞かなかった。だから彼女が積極的にそれに参加したのかどうかはわからない。推測を述べれば、いやいやだったんだろうと思う。なぜなら、きつと彼女はもう喧嘩に飽きてしまっていたからだ。はじめをつける、みたいな気持ちだったんじゃないだろうか、それをやったのは。

どこから話が始まったのか、どうやったらそんなことが可能だったのか、そもそも本当にそんなことが行われたのかどうか、俺は知らない。たぶん話は、俺が聞いたのよりも、本当はもっと小さな話

だったのだろうと思う。彼女が行おうとしていたのは、全国の不良を締め止めてことだった。天下統一だ。彼女がNo.1だ。日本のすべての不良は、彼女の膝元に屈するのだ。そんなことを、彼女はやるうとしていた。な、馬鹿げた話だろ？

彼女は毎日喧嘩をしたり、偉そうな奴と話したり、忙しくしていた。偉そうな奴だったって、不良のことだ。たぶん付近の不良の頭だろう。そんな奴らでも、彼女には頭が上がらないようだった。

そういえば、こんなこともあった。彼女と二人で日本家屋の大きな家に行ったことだ。

放課後、「行く場所がある、ついて来い」と彼女が言ったので、俺は彼女について行った。夜にならなきゃだめだというので、しばらく二人でぶらぶら歩いた。疲れたら喫茶店に入った。俺はコーヒを頼んだけど、彼女はオレンジジュースを頼んだ。そんなことを覚えてる。なにも話さなかったな。普段から談笑する間柄じゃなかったし、そのときはいつになく彼女はぴりぴりしていた。

で、時間も潰してさあ行ってみると、めまいのするようなかいで、おぞ気をふるような広さの座敷に案内された。その奥に、人の良さそうなちんまりした爺さんが座っていて、その前に座布団が敷かれていた。彼女はその座布団の方に進んでいった。案内してくれたがたいのいい兄ちゃんが、「あんたは」と俺を止めようとしたけど、俺は無視して彼女について進んだ。兄ちゃんは俺の肩をつかんで引き戻そうとしたけれど、ちんまり爺さんが「構わん」と言ううと引つ込んでいった。彼女は座布団に座って、俺はその隣の少し下がった場所に座った。

「兄さん」爺さんが俺を呼んだ。やけに低い声だった。「なかなか度胸がある。用心棒かい？」俺は気の聞いたことでも言おうとしたけど、威圧されていたので言葉が出てこず、うなずいただけに終わった。

「嬢さん、決めたか？」爺さんは彼女に向かってそう言った。「はい」と彼女は答えた。爺さんに負けず劣らず、威圧的な声だった。

「卒業したら、うちに来る気はないか？」

「終わったら、どういったことから手を引くつもりです」

爺さんはうなずいた。それでこの会見は終わった。

帰れるのかと思ったら、別の座敷に案内されて、飯を食わされた。こわもての兄さんがたくさんいて、なんだか知らないけどやけに豪華な飯だった。食事つーか、宴会だな。さっきの爺さんも奥の方にいた。俺はなんとかかんとか少し口をつけたただけであとはうつむいていたけど、彼女は平然と平らげていた。

宴会中、彼女の肩に手を伸ばしてきた兄さんがいた。俺はその手首をつかんで、そいつを睨みつけてやった。内心、ものすごく怯えていたし、手首をつかんだ俺の手はありえないほど震えていた。それでも俺はつかみ続けたし、睨み続けた。ああ、今日が俺の命日になるのかな、って本気で考えた。それでも俺は引く気はなかった。

「なんだあつ」その兄さんが俺を威嚇した。俺はなにとも言わなかった。というか、恐怖で口が動かなかった。兄さんは俺の手を振り払おうとした。俺は懸命に握って払われないようにした。一、三回振り払おうとしたあと、兄さんは立ち上がって俺の前に来、俺をいきなり殴りやがった。悪い奴だな。

「おい、よせ」別のこわもての兄さんがそいつを止めようとしたけど、それ以外の兄さんたちは静かに俺たちを見守っていた。俺は殴られたけど手を離さなかったし、まだ睨み続けていた。兄さんはもう一発俺を殴った。正直に言うけど、そんなに痛くなかった。俺はこれの何倍も痛いパンチを受けたことがある。

「馬鹿！」さっきよせと言った兄さんがそいつを取り押さえて、俺と離れた。俺はようやく手を離れたわけだけど、まだ睨み続けていた。彼女にちよっかい出そうとした兄さんも睨み返してきた。しばらくそうしていたけど、やがて兄さん、二カッって表情を崩し、はっはっは、と高らかに笑った。「とんだ純情野郎だぜ」

騒動の間中、彼女はまったく平然としていた。こっちを一目見ることすらなかった。ただ静かに食事が続けていた。

「はっはっは」という豪快な笑いと、手を叩く音が聞こえてきたので、そちらを向くと、さっきの爺さんが手を叩きながら笑っていた。「よし。よし。嬢さんもよし。兄さんもよし。たいした度胸だ」

彼女が食事を終えたので、俺と彼女は帰ることにした。彼女は爺さんのところに挨拶に行つたので、俺もついていった。

「本日はお招きいただき、ありがとうございました」

「しっかりやんな。それから、うちに入ること、もう一回検討してみてくれんか？」

「もう決めたことです」

爺さんは俺のほうを見て、「兄さんはどうだい？」唸るような低い声で言うもんだから、やっぱり俺は声が出せなくなったので、黙って首を横に振つといた。爺さんはうなずいた。

家まで送ると言われたけど丁寧な辞退して、俺と彼女は並んで歩き出した。暗い道路で、人気がまったくなかった。電灯もなかったし月もでてなかった。だから彼女の顔さえよくわからない暗さだった。

しばらく黙って歩き続けたけど、彼女はふと立ち止まると俺に抱きついてきた。俺はまだ声が出せそうになかったので黙っていた。彼女も黙っていた。だから彼女がなにを思っていたのか知らない。

しばらくそのままだった。それから離れて歩き出した。結局なんの会合だったのかとか、あの爺さんは何者なのかとか、何も聞かなかった。今も知らない。今後も知ることがなければ幸いだと思う。そのまま一言も話すこともなく、彼女と別れて家に帰った。

込み入ったことをここでうだうだ言っても仕方ないし、正直言って込み入ったことまでは俺は知らない。だから、彼女たちがしていたことの詳細を書くことはできない。

さっきも言ったように、三年の晩春俺が彼女の近くにいるようになってから、彼女は忙しくしていた。多くの不良を殴っては従えて

いた。夏休みになっても毎日のように出かけては殴っていた。どれだけ喧嘩が好きで連中でも、これくらいやれば誰でも飽きただろう。それくらい彼女は忙しく喧嘩していた。他県にまで出かけていって喧嘩することもあった。それで、彼女は無敗。サシなら、まともに殴られることすらなかっただろう。集団を相手にするときは、こっちも集団だった。俺はいつでも端から見ている。

そうした忙しさが、ぶつつりとなくなったのが二学期に入ってからだった。俺は彼女に呼ばれなくなり、家と学校を往復する日々に戻った。さすがに少しは興味があつたので、地位が上っぽい奴を掴まえてなぜ暇になったのか聞いてみると、「だいたい勢力争いは終わった。今度、全国の主だった不良を集めて、大規模な抗争がある予定だ。それで勝った奴が全国No.1だ。だからそれまで俺は暇だ。もちろん俺たちは準備に忙しいけど」という話だった。よくわからなかったが、今度どつかで乱闘があつて、それで全部おしまいになることはわかった。すごい話だ。

暇なとき、彼女はなにをしていたのか。これはちゃんと本人に聞いた。「色々だ」それが答えだ。とりあえずスポーツをやっていたらしい。健全だな。部活を真面目にやる奴はいなかったけど、ちゃんと道具は揃っていたから、適当に練習していた。暇そうな奴を掴まえては相手をさせていたそうだった。俺はなにもしなかった。その練習の光景を眺めることもあつたし、さつさと帰って寝てしまうこともあつた。やる気なかつたからな、何事にも。練習する彼女の姿は綺麗だった。誰よりも楽しそうにしていた。いや、それはいついかなるときでも、か。

次の日に抗争が行われる、と俺が聞いていた日、彼女が俺のところに来てきた。「デートしようぜえ」なにかの気まぐれだろう。俺もなにかの気まぐれで、特に抵抗することなく従った。とはいえ、前のようにただ並んで歩くだけだった。

歩いて歩いて、とにかくくたびれるくらい歩いて、河原にたどり着いた。俺が初めて彼女に会った河原だ。彼女が俺を連れてきたの

かもしれないし、俺が無意識のうちにそこに足を向けていたのかも  
しれない。彼女は俺をのしたあと座っていた場所に駆けて行って、  
また座った。前と同じように、体育座りだ。俺もついて行って、前  
に俺が倒れていた場所に腰を下ろした。

「暇だねえ」彼女が言った。そんなことはないだろうと俺は思った  
けど、口には出さなかった。

「暇だな」俺は言った。俺の現状を表す言葉だ。それからしばらく  
黙っていた。

「死ぬのって」「川を見つめながら彼女が言った。「気持ちいい  
かな」

「……。たぶん、あなたの思うとおりだろうさ」

「そっか。それはいいな。面白い」彼女は笑わなかった。

「卒業したら、どうするんだ？」俺は訊いた。

「どうもしないさ。今までと同じだ。お前はどうするんだ」

「どうもしないさ、今までと同じだ」

彼女はぎゃははと笑った。「つまんねえな」

「当たり前だ」

「だよな」彼女は仰向けに寝転んだ。じつと空を見ている。俺はそ  
んな彼女の顔を見ていた。「空って、無限だと思ったことはないか  
い」

俺は答えなかった。無限だと思ったことも、有限だと思ったこと  
もない。

「お前、いつ死ぬつもりだ？」

「さあ、考えたこともない。今生きていると思ったこともない。死  
んでいても生きていても、たいして変わらないと思う」

「そーか」と言っただけ、彼女はなにも言わなかったので、俺は訊  
いた。「あんたはいつ死ぬつもりだ？」

「あたしが死ぬときに」そりゃそうだ。

「あんたが死んだ次の日に、俺は死ぬよ。あなたの死を見届けてか  
ら」そうだ、俺は確かにそう言ったな。なぜ言ったか。理屈もなに

もない。たぶん、かつこつけたかつたんだろう。もちろん、今ではそんなこと少しも思っていない。俺は勝手に死ぬつもりだし、彼女の死を見届けるつもりもない。

「馬鹿だな」と彼女は言うのと、起き上がって行ってしまった。別に怒ったのではなく、ただ帰りたくなっただけだろう、と俺は思った。俺は仰向けに寝転がって空を見た。広いな、と思った。無限かどうかは知らない。

抗争が行われるという場所は、広いところだった。電車に揺られて二時間足らず。各駅とはいえ、遠いな。尤も、（本当かどうかは知らないが）全国から来る奴はもつと遠くから来るんだから、大変なことだ。なんでそんなだっ広いところがあるのか、詳しくは俺は知らない。なんらかの事情があるんだろう。寂れた場所の一つや二つ、あつたつておかしくない。

昼過ぎの予定だったから、そんな必要はなかったのだけど、俺は始発の電車に乗った。一応睡眠はとったけど、たぶん三時間くらいしか寝ていなかった。それでもまったく眠くなかった。体調もバツチリだった。俺が戦うわけじゃないけどな。電車の中には誰もいなかった。当たり前か。暗くて見えなかった景色が進むごとに次第に明るくなってきて、それは馬鹿みたいにのどかな風景だった。ビルもない。家もない。畑と林ばかりある。森もあつたかも知れない。もつと進むと畑もなくなった。ただの野っ原だ。嫌いじゃないね、俺は。

電車を降りて、野原の真ん中に向かう。そこが決闘の場所だ。風が吹いて気持ちいい。うそだ、寒い。朝だ。鳥が飛んでいく。雑草がところ構わず伸び放題になっている。どうでもいいけど、寂れた駅だったな。一人も利用しない日だって、あるに違いない。

その野原の真ん中において、俺は戸惑った。なにをしようという目的があつたわけではないのだ。ああ、俺は馬鹿だなあ、と思った。

とりあえず歩くことにした。広い野原をただただ歩いた。嫌になるまで歩いた。すぐ嫌になった。

いつ頃だったか、まだ少し暗さが残っているくらいの時刻に、また駅から出てくる奴が見えた。遠くから近づいてくる様子を、俺は立ち止まって見ていた。そのうちその姿が完全に認識できるくらいまで近づいた。「よっ」と彼女は片手を挙げた。

「早えーな」俺は言った。もちろん、人のことは言えない。ぎゃははと彼女は笑って、「馬鹿だな、あたしもお前も」と言った。

「あんた、なんでこんなことやるんだ？」俺は彼女に訊いた。

「こんなこと？」

「喧嘩、するんだろ？」訊いた方がいいが、俺はその答えをなんとなく予想できていた。理由なんてない。それが答えだ。もっといえ、それが生きる目的だったからだ。つまり、俺が彼女に負けるまで喧嘩していた理由と同じだ。

彼女は答えずぎゃははと笑った。高らかに空まで届く笑いだった。俺はその笑う姿を見て、王者の風格だな、と思った。チンギス・ハーンが見渡す限りに満ちている群集に向かって、高みから手を差し伸べているような、そんな光景と彼女が重なった。馬鹿げていると思うだろ？なんとという妄想癖かって。俺もそう思う。けど、当時の俺は真面目の真面目大真面目でそう考えていたんだ。馬鹿にしてやってくれ。

ひとしきり笑って、彼女は「お前はやらないのか？」と訊いてきた。もちろん俺は首を横に振った。もう喧嘩からは引退。錆びた余生をさびしく送る身だ。

「あたしもこれでこの遊びはおしまいだ。行くところまで行ったからね」

「行くところまで、か」そうだろう。全国の不良の頂点に立つといふのだから、もうその先はない。あるいは、ヤーさんの仲間にもなるほかない。

「もつつまらん。飽きた」

「じゃ、止めちまえよ。今日だって、なんにもならないぜ」

「そうだな」彼女は仰向けに寝転がった。きつと彼女の好きな空でも眺めているんだろう。

「無限か？」俺は訊いた。

「知らんさ」嬉しそうな顔して、ずっと空の方を眺めてやがる。俺は何か言おうと思ったけど、止めた。どんな言葉もたぶん意味がなかったからだ。

しばらくして「腹が減った」と彼女が言ったから、俺は持ってきていたパンを全部くれてやった。「全部はいらんよ」と彼女は言ったけど、全部やった。腹が減って仕方なかったけど、全部あげたかった。それに、俺は戦わないのだ。腹が減ったって見物くらいはできる。

「もうそろそろお別れかな」パンにむさぼりつく彼女を見ながら俺は呟いた。

「なにと？」

「あんとだ」

「お別れかあ？」

「そうなんだよ」きつと、あんたの隣にずっといることはできない。それでも、今はあんたの隣にいられてるだろう？

だからそれは、お別れなんだ。

時間が経つにつれて人が集まってきた。駅の方から来る奴もいたし、全然別の方角から来るやつもいた。そういう奴らは、いったいどうやって来たんだろうな。集団でやってきては、近くにたむろしていく。野原にいくつかの集団が散在している形になった。うちの高校の奴らもやってきて、彼女の近くに寄ってきた。そのときに俺はあくびを一つして、彼女から離れた。野原には不穏な空気が流れていたけど、結局開始時刻までは何事も起こらなかった。彼女は俺が去ると立ち上がって、配下の奴らと楽しそうに話していた。

俺は遠くの少し高くなっている場所に行つて、抗争の様子を眺めることにした。

俺の時計でピッタリ午後三時。ちゃんと出かける前に時報を聞いて合わせてきた。針が12の数字に重なった瞬間、乱闘は始まった。大勢の人間が入り乱れて殴り合いをする。あまり面白い光景じゃない。いつを終結の時間にすべきなのか知らないけど、午後五時にはとにかく全部終わっていた。その時間に俺のところに彼女がやってきたからだ。

殴り合いの光景を描写するつもりはない。ただ、彼女は強かったな。一撃もいれられたようには見えなかったし、実際あとで近くで見るときも、殴られた跡はなかった。手近な奴を殴つては、かかってきた奴に蹴りをいれる。全てがあらかじめ台本で決められていたかのように滑らかに動き、彼女は迫ってくる敵を倒していった。彼女が輝いているんじゃないかと思った。彼女以外のものは全て、彼女のために存在していた。綺麗だったな、その風景は。やがて立っている人間が彼女と数人だけになり、乱闘は終わった。ついでに言えば、彼女の喧嘩人生も終わった。

「楽しかったか？」俺のところに来てきた彼女に俺は訊いた。

「それなりにね」ぎゃははと彼女は笑った。

## おわりに

長いこと話してきたな。もう、終わらそう。

それから彼女は卒業まで一回も喧嘩せず、勉強したり遊んだりして過ごした。たぶん今でも喧嘩はしていないだろう。俺もたまには彼女と勉強したり遊んだりした。

ああ、そうだ、なんとなく思い出せた。俺が彼女と最後に会ったときのことだ。いつ頃かまでは思い出せない。卒業よりは前だ。

「デートしよう」その日彼女は俺を誘った。もちろん俺と彼女が付き合ってたなんてことはない。デートだったって、歩くだけだ。だからその日も歩くだけだった。

その時に大学に受かったことや、一日も行く気はないことなんかを聞いた。

「じゃ、なにをするんだ？」

「したいようにするさ」

きっと彼女は生きたいように生きるんだろう、とそのとき思った。

今も、生きたいように生きてるのかな。きっとそうしてるだろう。

そのあと、きつと死ぬのだろう。

「お前は、これからどうする？」

「真面目に生きるよ。つまり、つまらなく生きるという意味だけど」

「どうして？」

「俺には、あんたの隣を歩く資格がないからさ」その資格があればなど、涙が出るくらい思う。それでも、ずっと彼女の隣を歩くことは、俺にはできないだろうな。俺にはそんな生命力はない。

それからしばらく歩いて、彼女はふと上を向いて「空だ」と言った。俺も見上げた。晴れた日で雲ひとつなかった。

それから一言も話さずに別れた。そのときから、一度もあってい

ない。

卒業してから俺は一浪して大学に入って、つまらない人生を送っている。彼女は大学に入ったあと、すぐに辞めてしまったらしい。それから彼女は音信普通になった。彼女が今どこでなにをしているのかは、家族にだってわからない。

俺はときどき空を見上げる。それから彼女のことを考える。

彼女は今でも空の無限を信じているのだろうか。無限を信じて歩いているのだろうか。

どうか世界よ無限であれ、と心から思う。

## 蛇足 祝福に代えて

以上が、私の友人の書いた小説の全てである。しかし原稿をもらった私は、以下の蛇足を付け加えたいと思う。

「うん、悪くないんじゃないか？」私は原稿を読み終えて言った。「結局、名前はほとんど出てこなかったよ。付けた意味はなかったな」彼は名前の意味がわかっていないらしい。いや、ここではそんなことはどうでもいい。

「では、これからのことを話し合おう」と私は言ったが、彼は無視して私の部屋から出ていこうとした。「いや、ちょうどいい。君の部屋に行きたいと思っていたところだ」

彼はやつと振り向いた。「なに馬鹿なことやってやがる」

「手紙だよ、手紙」

「手紙？」

「気づかなかつたのかい。彷徨さんから来た手紙には、ちゃんと意味があつたんだよ。あの手紙は、今どこにある？」

「知らんし、興味もない」

「わかつた、僕が探してやる。捨ててはないんだろう」と私が言うと、彼は私に家に入って欲しくなかつたのだらう、「持ってきてやる」とあわてて自宅に戻った。

二時間ばかり待たされた後、彼が手紙を持って戻ってきた。私はそれを受け取って、読んだ。三度ばかり読み返した。「思ったとおりだ。君、これが来てから、何日になる？」

「さあな。ひと月は間違いない経ってるかな」

「じゃ、もうだめかも知れないな」

「なんだよ。そこになにが書かれてあるんだよ」

私は彼に手紙を返した。「縦読みだよ」

「なんだと？」

「行の頭の文字だけを取っていくんだ」私が言うと彼は手紙に目を落とした。

「あそこでまつてる」

「と、なる。偶然とは考えにくいだろう？もしかしたら、彷徨さんはどこかで君の事を待っているのかも知れないな」

彼は衝撃を受けたらしかった。馬鹿な、と繰り返して呟いていた。

「あそことは、どこだろうな。もし思いつくんなら、行ってみるがいい」

「思い、つかない」

「確かに君の小説を読む限りでは、彷徨さんと君の二人にとって大事な場所は、なさそうだな。強いてあげるなら、君と彷徨さんが初めて出会った、河原くらいか……」私は言った「けどね、小説に書かなかつた場所なら、どうだい？」

彼を見ると、悪戯がばれた子どものようにギョツとしていた。

「誰だつて、全部の全部さらけ出すことなんて、するものか。そんな奴がいたら、それは狂人だよ。君は、狂人ではないはずだ。だから、君は本当に大事な思い出は、小説には書かなかつたはずだ」

彼は沈黙していた。

「本当に思いつかないのならいい。もちろん、ただの偶然という可能性もある。そして、手紙をだした当時本当にどこかで彷徨さんが待っていたとして、時間が経った今はもう待っていないかもしれない。だから、そういつたことが理由で君が動かないのなら、私は非難するつもりはない」

彼は聞いているんだかいけないんだかよくわからない顔をしていた。聞いていようとまいと、私は続けた。「しかし、もし君が、自分が彷徨さんにふさわしくないと思うがゆえに動かないのだとしたら、私は軽蔑するね。芥という自称は、まさに君にふさわしい名だということになる。いや、ゴミという名さえ、君には過ぎるだろう。もし君が動かないのならね」

彼は私を睨みつけて、何も言わずに出て行った。

その後彼がどうしたのか、私は知らない。彼に会ったことはあるが、お互いそれについて触れたことがない。彼が彷徨さんに会ったのかどうか、真実は闇の中である。

ただし、隣に住んでいる私が見る限り、彼の外出は増えたようである。出て行ったきり帰ってこない日もたびたびである。

彼もまた彷徨さんについて、各地をうろつろしているという想像が、許されるのかどうか私は知らない。

彷徨に祝福あれ！

某年某日某所にて

名も無き小説家

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6221f/>

---

彷徨に祝福を

2010年11月14日09時22分発行